

まだ学校にあらぬ子供ころ、姉と弟と父母につれられて札幌にきた私は、深い緑につつまれた昔の札幌の、自然のなかで子供時代をすごした。

そのころの大通りの西の半分は、練兵場とよばれていた広い草原で、私たち子供はそこで日暮れまで遊びほうけていた。火薬庫の跡にくずれた土手があり、電光型に掘った、すたれたごん壕もあった。土地がゆるやかにうねっていて、春はその凹みに雪どけ水をたたえ、澄んだ水のおもてに、青空と水底の若草の萌黄色がゆらいでいた。草原のところどころに、ニレとカシワの木があった。朽ちかけた大きい、ニレの根元の空洞は、にわか雨のとき、私たちが雨宿りするところであった。

練兵場の北がわは、いままも面影をのこす雑木林でヤドリギが多く、鳥の巢のようなあの緑のふしぎな形が、私たちの興味をそそった。冬の日さむい風がふくと二枚の葉が頂に赤い実をつけ、クルクル廻りながら足もとに落ちてきた。クリスマスにはまた、このヤドリギの枝で教会の白い壁をかざった。

私たち子供は、毎日、この雑木林をくぐり、練兵場の草原を横ぎって小学校にかよ

った。校庭はチモシーの広々とした庭で、カラマツの並木にかこまれていた。

昔の札幌は、街かどのところどころに天然の木が茂っていた。桑園界わいほことに多かつたようで、ニレはもとより、ハンノキが赤いふさを垂れてむらがつていたり、イタヤの大木が道に緑のアーチを架けていたりした。道幅はあつても人通りがすくなく、クロバーのなかを踏みわけ道がかよい

私 と 自 然

今 田 敬 一



札幌は目だつて変貌している。練兵場の草原は区画され、ニレとカシワの大木は伐り倒され、たちまち家がたち並んだ。ヤドリギの雑木林には、いかめしい裁判所ができた。区画整理や路面の手なおしのたびに、街かどの木は姿をけし、その一つ一つにわたる私の思い出も消された。

私は桑園から、北大のニレの木陰をたどり、校庭を通りぬけて北九条の札幌中学に

牛が道ばたに放ち飼いされていた。私の家にも、自家用のホルスタインの牝牛が頭いて、私は牧童になつたり、草を刈り、乳をしぼつたりであつた。養蚕講習所の桑畑をあずかっていた父は、風を防ぐポプラを植え、札幌の西の一面にみごとなポプラ並木をつくつた。

✦

中学にすすんだ大正のはじめころから、

通っていたが、いつとなく、農学部で林学科にはいる望みをかためた。それは私自身の考えというより、札幌の自然が、私の志望を、そりきめてくれたようなものであつた。そして、自然愛護の精神に胸をふくらませ、北大予科に入学したのが大正四年。この年、三好学先生の「天然記念物」が出版されていた。

北大在学中からたいそうお世話になつた

新島善直先生は、自然保護についても深い関心をよせておられ、教室にはコンヴェンツの「天然記念物紀要」をはじめ、二十世紀初頭の自然保護に関する文献がそろつていたし、第一次大戦後の、郷土愛護などの問題をふくめた文献も、やがてたくさんはいつてきた。こんなことで、自然保護の勉強も一応できたつもりであつた。

✦

私が大学の助手になつたのは円山、藻岩山、野幌などの林が天然記念物に指定された大正十年でこの年私は、新島先生と植物分類学の工藤祐舜先生の靴をもつて、阿寒と登別の自然の調査にでかけた。この調査が元で大正十二年、登別の林は天然記念物になつた。阿寒の調査は、国立公園を予想しての調査で、私はその風景の特質について、先生の代筆を仰せつかった。こんなことがはじまりで、私は北海道の自然保護と、ながい間、かなり密接なつながりをつづけた。

しかしそんなことよりも、私はこうしていつまでも、自然を愛しつづけていられることをしあわせに思っている。この自然愛護の心は、子供の時代に深く植えつけられたものようである。

(北大名誉教授)